

## 令和5年度研修概要

### 「国語科において言葉に着目した深い学びのある授業づくり」

山口大学教育学部附属光中学校 廣中 淳

#### 1 国語科の「深い学び」の確認

昨年度の個人研修を振り返ってみる。学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の指導上の配慮事項として各教科の「見方・考え方」を重視することとされている。ここでいう「見方・考え方」とは、「各教科において身に付けた知識・及び技能を活用したり、思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と定義されている。国語科は以下のとおりである。

中学校学習指導要領から

##### 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1)社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2)社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や表現力を養う。
- (3)言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

中学校学習指導要領解説から

言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で対象と言葉、言葉と言葉の関係を言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高めることである。

つまり、「対象と言葉、言葉と言葉の関係を言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり、問い直したり」することで生徒たちの考えが深まるような授業の構築が重要であることは間違いない。そして教材の言葉にせよ友達の意見の中の言葉にせよ、教師の言葉にせよ、生徒たちの言葉についての認識の広がりや深まり、言葉に対する新たな見方が授業の中で生まれる学びは「深い学び」であろう。

#### 2 「深い学び」のある授業づくり—「読むこと」文学的文章の授業を通して—

##### (1) 言語内容から言語形式に着目させる授業

山口県中学校国語教育研究協議会では、数年前から「深い学び」について研究を重ねてきた。令和2年度には全国大会を開催する予定であった。ところがコロナ禍により中止となった。本稿では県中教研の「深い学び」の提案を参考にするとともに、光支部での研修も併せ「読むこと(文学)」の授業づくりを報告する。

県中教研の提案から引用する。

私たちが考える「深い学び」では、「教材を媒介に言語活動を行いながら、教師の適切な働きかけにより、言葉に対する生徒の認識が深化・変容したか」が問われる。では、どのようにして言葉に対する生徒の認識を深化・変容させるのか。その手立てとして、私たちは「表現意図」という視点から、授業づくりを考えた。「書き手・話し手」が言葉を発するとき、そこには必ず「表現意図」がある。この「表現意図」は二つある。一つは「どのようなテーマにするのか」等の創作意図があり、それは「言語内容」となっていく。もう一つは「どのような表現方法や言葉の選択とするか」等の叙述意図があり、「言語形式」として現れる。そして、「表現意図」「言語内容」「言語形式」は緊密につながり「書き手・話し手」の「表現上の創意工夫」として現れる。この「書き手・話し手の表現意図」を考えることを通して、その根拠となる「表現上の創意工夫」に気づかせていくことが言葉に対する生徒の認識を深化・変容させていくことになる考えたのである。

第49回全日本中学校国語教育研究協議会(山口大会)要項から

つまり、県中教研の提案は「表現意図を考えることを通した言語形式の理解」を「深い学び」の切り口としたのであった。

## (2) 文学教材「故郷(魯迅)」から「深い学び」を構築する

### ①「故郷」の教材としての価値

「故郷(魯迅)」は息の長い教材である。現在、中3の教材としてすべての教科書に掲載されている。私も中学時代に学習したのであるから40年以上、すべての日本人が学習したことになる。

学習指導要領によると、中3年「読むこと」の学習内容は以下のとおりである。

第3学年 学習内容 C読むこと
○構造と内容の把握
ア 文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などをとらえること。
○精査・解釈 イ内容 ウ形式
イ 文章を批判的に読みながら文章に表れているものの見方・考え方について考えること。
ウ 文章の構成や論理の仕方について評価すること。
○考えの形成・共有
エ 文章を読んで考えを広げたり深めたりして人間、社会、自然などについて考えをもつこと。

これらの学習指導要領の学習内容を受けて、現行の各教科書では以下のような指導目標を立てている。

光村 図書	状況の中で 多様な状況で生きる人の姿に思いをはせ、考えを深める 登場人物の考え方や行動を批判的に読み、作品を批評しよう。 ・人の生き方や社会とのかかわり方を考えるうえでの、読書の意義を理解する。 ・小説を批判的に読み、時代や社会の中で生きる人間の姿について考える。
東京 書籍	関係を読む ・登場人物の思いについて考えながら、作品を読み深める。 ・作品を読んで考えを深め、社会の中で生きる人間について、自分の意見をもつ。
三省 堂	読みを深め合う ・登場人物の言動や考えを捉え、作品に表れているものの見方や考え方について、自分の考えをつくる。 ・人物の心情と描写との関係や人物設定など、表現の特徴や工夫を捉え、評価する。
教育 出版	小説 ・理解や表現のために必要な語句の量を増やし、話や文章の中で意識的に使用する。 ・一人称の語り方について理解し、作品の表現の仕方を評価する。 ・「希望」について考え、人間、社会などについて自分の意見をもつ。

私見を述べるならば、「故郷」という作品は、中学生にとって決して親しみやすいものではない。むしろ、わかりにくい、何が言いたいかわからない作品である。つまり、中学生から遠い距離にある作品なのである。だからこそ、この教材の学びの鍵は、その距離感、わからなさにあるのではないだろうか。生徒たちの近い世界ではないがゆえに、登場人物の心境や場面描写、象徴的表現、作品からのメッセージを考え、そして、生徒一人ひとりが現在の自分たちの置かれてる状況から、この作品を評価する。そのような学びができる作品であるといえる。

### ②「故郷」の授業プラン

さて、中教研光支部国語部では、各学校において、様々な授業プランを考えた。以下は各学校から提案された授業プランである。

A案 「故郷」をこれまでの学習で得た力で読む 初発の感想から問いをつくり深めることはできないか。 ・紺碧の月・・・(色に着目した情景描写) ・旦那様…なぜ身震いしたのか。(登場人物の心情)
---

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヤンおばさんの態度が変わったのはなぜか</li> <li>・ルントウは灰の中に椀や皿を埋めたのか(登場人物の行動)</li> <li>・希望、地上の道とは(作者のメッセージ)</li> </ul>
<p><b>B案 「故郷」の描写に着目し登場人物の心情の変化をよむ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品に登場する色</li> <li>・心情 私とルントウ 再開の場面</li> <li>・比喻 ルントウ…神秘の宝庫 …でくのぼう</li> <li>・呼称の変化 おまえ 旦那様</li> </ul>
<p><b>C案 「深い学び」となる学習課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「だんな様！…」にこめられたルントウの思いは</li> <li>・ルントウは「でくのぼう」だろうか。</li> <li>・ヤンおばさんを登場させた意図は</li> <li>・「悲しむべき厚い壁」と「目に見えぬ高い壁」を考える。</li> <li>・情景描写の効果 紺碧の空 金色の丸い月</li> </ul>
<p><b>D案 回想場面と離郷場面に着目した課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・回想場面にはルントウが出てくるが離郷場面ではルントウは出てこない。</li> <li>・語り手の視点の動きが、空からスイカへ(上から下)と砂地から月へ(下から上) この違いは何を意味しているのか。</li> <li>・離郷のときの母からの話をきいたときの私が何を思ったか。否定しない私を考えさせる。</li> </ul>

これらの学習課題の中から「ヤンおばさんを登場させた意図」「離郷場面で、(私は)希望は実現すると考えているのか」という二つの課題を設定した「深い学び」のある授業について、述べることにする。

### ③「ヤンおばさんを登場させた意図」を問う学習課題 (市内A中学校による実践例)

物事の主ではない周辺の役割や役目を担う人物のことを端役という。「ヤンおばさん」は私が故郷に帰った際に登場した筋向いの豆腐屋の婦人である。かつては豆腐屋小町と呼ばれ、愛嬌の良い存在であったと思われる人物であるが、長年の生活の困窮さから意地の悪い、ひねくれた人物として登場する。その意地悪さが強烈なのであろう、端役とはいえ故郷の中ではルントウとともに印象に残る人物である。

中心発問として「ヤンおばさんは、この作品に必要なか、不要か」と投げかけた。

個人思考の時間をとったあと、授業者は黒板にネームカードを貼らせていく。ほとんどの生徒が必要のほうにネームカードを貼っていく。作者の魯迅が必要な登場人物として設定している以上、必要だと考えることは至極当然のことである。登場させる必要はないと答えた生徒は4人。

授業者は、「なぜ、ヤンおばさんを登場させたのか」、作者の意図を生徒たちに思考させていく。生徒たちがグループの話し合いを経て表出した主な意見は、次のような意見であった。

必要だと考える	不必要だと考える
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルントウだけでは美化されすぎる。</li> <li>・故郷が変わってしまったことを強く伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時の流れを感じさせる役割としてならば特に必要はない。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・私の立場をヤンおばさんが説明している役割をもたせている。</li> <li>・ルントウとの再会も悲しい再会になることの伏線的な役割をもたせている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話の展開に大きく関わるような人物とは思えないので、特に必要なくても大丈夫だと思う。</li> </ul>
--	--

これらの意見をふまえて、再度、生徒たちに「ヤンおばさんは、この作品に必要なか、不要か」自らの意見を綴らせていった。個人思考から集団思考を経て、もう一度、個人思考に戻り、考えを深めさせたのである。

#### ④「離郷場面で、希望は実現すると考えているのか」を問う学習課題（本校での実践）

「故郷」の最後の場面、離郷の場面での学習の際のことである。生徒たちが、最後の場面に明るいイメージを抱いていない様子を感じ取れた。つまり、魯迅の言う「希望」が実現するとは感じていないのである。私は「離郷場面で、希望は実現すると考えているのか」を問い、立場をとらせてみた。すると、ほとんどの生徒が、実現しないとこたえたのである。理由は、最後の場面の表現からネガティブな印象を抱いていたのだ。「新しい生活」といっても何ら具体的なものは描かれていないし、「歩く人が多くなれば道になる」という表現にしても、人任せなものを感じると言うのである。そこで、「もし、君たちが思うように、作者の願う希望が実現しないならば、この社会は変わらないし、作者もこの作品を世に出す意味はないだろう」と問いかけ、「作者は希望は実現すると思っているのではありませんか。もっと表現を探してみよう」と促した。そうすると、生徒たちは「紺碧の空の上には金色の丸い月が掛かっている」という最後の表現に着目した。私は、その表現に着目してほしかったのである。この表現はルントウの回想の中にも登場する。つまり、希望を象徴した表現なのである。この表見を手掛かりに作者の意図は、決してネガティブなものではないことを見出したのである。

### 3 考察

物語の端役について、授業で強いて取り上げることは少ない。「故郷」においてヤンおばさんは面白い人物であるが、「必要なか、不必要か」考えることは通常はないことである。今回の実践では、あえて端役に着目させることで、筆者の意図や全体の構成の工夫に迫ったわけである。そもそも、作者は必要だから描いているので、この学びの必然性は薄い。この学びが生徒からの生み出されることもないであろう。けれども、「深い学び」として教師が有効に仕掛けた好事例であるといえる。なぜなら、ヤンおばさんの設定が、私が「新しい生活」を語る場面の「やけを起こして野放図に走る生活」を象徴していること、ルントウの出会いの伏線的な役割を果たしていることなどを見出すことができたからである。

また、「故郷」ではルントウの絶望感が強いだけにネガティブに終わりがちである。生徒たちは、印象が強い作品であればあるほど、その印象に引っ張られやすい。描写を丁寧に読まずに結論づけてしまうのである。表現から作者の意図に迫ることで作品のメッセージを見出すことができたのである。

### 4 終わりに

本稿では「故郷」を教材として取り上げたが、教材となる文学的文章は多様である。どの教材でも「深い学び」が成立するとは限らない。また、本稿の学びがどんな生徒にも有効だとも言えない。いかに汎用性をもたせるか。国語の授業は難しい。けれども本稿の実践を一つのバリエーションとみなし、今後も有効な学びを増やしていきたいと考えている。